## 「江戸大地震之図

安政江戸地震(1855)を描く絵巻。ここに紹介する島津家伝来のものの他に、同様の絵巻がアイルランドのチェスター・ビーティー・コレクションにも蔵されている。後者は、アイルランド人で鉱山業に成功して財を成したチェスター・ビーティーが1917年世界一周旅行で日本に立ち寄り、収集したもので、もともとは近衛家のものであったという。二本の絵巻に構図上の違いはないが、後者では路上の人物などが省略されたり、看板の文字が多少異なるなど細部での差異が認められる。このことから、後者は東大史料編纂所本の写本と考えられている。

さて、作者が誰であるのか、あるいは誰が制作させたものなのか、現在のところ判ってはいない。 しかし、すでに述べた原本と写本の存在などから、 つぎのようなことが推定されている。

江戸地震で島津家は死者二名を出し、幸橋門内の中屋敷(幕末には上屋敷)の長屋が焼け、三田の藩主居屋敷(通常は上屋敷と称す)の長屋が倒壊した。江戸地震やその後の江戸の様子を伝えるために絵巻が制作され、国元に送られた。この時鹿児島藩主は斉興が致仕、その子の斉彬の代となっている。島津斉興、斉彬の父子二代の養女が近衛忠熈と忠房の父子二代のそれぞれに嫁した。近衛家に嫁した斉彬養女光子は弘化二年(1845)生まれだから、まだ10才。この幼妻にも江戸地震の様子を知らせ、また、近衛家の人々の目に触れる含みを以て、その絵巻の写しが送られたのではないかということである。以上は多分の想像を含む推定だが、この前提に立つと、以下のような情報が得られる。

絵巻は黒塗りの板塀に囲まれた屋敷内での茶事が営まれ、庭番は見頃の紅葉から目を転じて空模様を凝視する場面から始まる。続いて市中の瀬戸物屋、古着屋、武具屋などが軒を連ねる路上を行き交う人々を描いて、江戸の常の賑わいを伝える。ここから場面はなにか異様な事態の発生を表す暗雲に覆われ、一転して倒壊する家屋が描かれる。地震の発生とその直後の人々の様子である。遠景の薄暗い空に赤く火の手の上がる。やがて火の手が拡がり、柱や瓦の下敷きになって逃げられない人々が炎に包まれる惨状が描かれる。この震災絵

巻のクライマックスである。続く焼け跡の始末で は、黒こげの死体をみて号泣する女や焼け死んだ 人を棺桶に収める人、埋葬に向かう人、焼け跡を 掘り返す人、老人を背負い避難させる人、急拵え の仮小屋、風呂屋の賑わいなど、沢山の群像を配 しながら、時の経過を兼ねて震災直後のさまざま な人の動きが描写される。そして、雪の降る中を 例年11月22日から28日にかけて執行される一向 宗の報恩講中が描かれることで、徐々に日常への 復帰が表象される。復興への悲願成就が籠められ 雪だるまに片目が入れられる。この絵巻の構図の 巧さは、絵巻を通じて路上の左右(画面では上下) を分け、絵巻を見る者の手前になる画面下部は庶 民の動き、道を隔てて向かい側は築地塀に囲まれ た武家屋敷というように、身分の違う人々の異な る対応を一つの画面に収める点である。この道は 最後に江戸城の見附に導かれ、富士山を背景に鶴 が舞う江戸の安泰を描いて終わる。

では、この絵巻に島津家に関わる情報はないのだろうか。幸橋門内の島津家中屋敷の被害は「表長屋一棟潰并外構練塀所々倒其外長屋土蔵など大破」し、また「屋敷半焼ニ而止る」とある。江戸城の被害に言及することは御法度であった。描かれる大名屋敷の幔幕家紋は合致しないが、薩摩藩の見附内の屋敷をここでは見附の外に描く工夫を凝らしたと考えることもできる。この見附が幸橋門と判断される根拠は、「御用」提灯を掲げるお救小屋が実際に幸橋門外に設けられているからである。

この絵巻は、地震後の混乱を時間軸に沿いながらストーリー化する、つまり、混乱に秩序を与えて、未知の人々に事態を分かりやすく説明した成功例であろう。

## 参考文献;

『秘蔵日本美術大観』5巻 (講談社、1993)

『絵巻絵本解題目録』(勉誠社、2002)

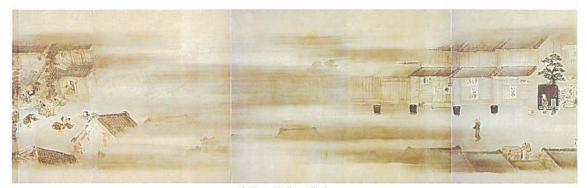
『新収日本地震史料』 5 巻別巻2-1

(東京大学地震研究所、1985)

\* 黒田日出男氏(東京大学史料編纂所教授)、宮崎ふみ子氏(恵 泉学園大学教授)にそれぞれ貴重なご教示をいただいた。

北原糸子/東洋大学非常勤講師

## 「江戸大地震之図」(東京大学史料編纂所蔵) 紙本着色 卷子36cm×892cm



地震の予兆・発生



遠くに火の手あがる



被害を受けた大名屋敷

死者の片付けと埋葬



修復はじまる江戸城見附の櫓門

お救い小屋に集まる庶民



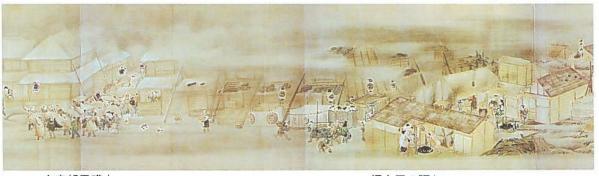
地震前の江戸市中の賑わい



家屋の倒壊



延焼する家々



一向宗報恩講中

仮小屋の賑わい